

1 学期始業式式辞（全日制）

2月から続く新型コロナウイルスの感染拡大に歯止めがきかず、終息に向けての先が見通せない不安と不便が続いていますが、何とか、予定通り、始業式を迎え、学校が再会できることに安堵をしています。

本校は3月4日から臨時休業に入り、予定していた授業や行事、部活動などが実施できず、日常生活が一変しました。臨時休業が長引き、行動が制約される中で、学習面だけでなく、生活のリズムが乱れ、運動不足やストレスによる心身へ健康への影響も心配していました。しかしながら、各自が学校の指示に従い、自ら冷静に判断し、行動をしてくれたお陰で、感染を抑止することにつながっています。

ところで、春休みからは部活動が再開されましたが、春休みに予定していた全国選抜大会をはじめ文化・スポーツの全国大会・地方大会が軒並み中止となりました。3月に照準を合わせて練習を重ねてきた生徒にとっては、失意の春となりました。その悔しさは察するに余りあるものですが、積み重ねた努力は決して無駄ではありません。今回の無念を心の糧とし、挫折を成長へのエネルギーに代えて、次の大会に向けて奮起してもらいたいと思います。

新型コロナウイルスがもたらす複合的な不安は当面なくなりそうありません。不安を抱えながらも前に進んでいけるようになるためには何を大切にしなければならぬのか。昨年度末の校長メッセージでは、校訓、「自律・創造・協和」を心のよりどころとして、この難局を乗り切ってほしいこと、そして、誠実さ、自分の責任を果たすことが大切であることを伝えました。

さて、集まりの中止や自粛で活動の範囲が狭まっていますが、意識まで狭めて自分の殻に閉じこもることはありません。自分を知るという意味では、むしろ意識を広げる機会です。

集まることもできずに辛い人もいるでしょう。でも実際に会わなくても、こういうときに心の支えになるのが本当の友達という考え方もできます。避けられない不運を拒否するのは人間の可能性と人生の意味を受け入れないことに等しいことです。感染症の流行という不幸を受け入れたことで、自分の人生のために、次に何をすればいいのか、具体的に见えてきます。

今、苦しい人はその苦しみが自分の人生に何を教えようとしているのか考えてみてください。苦しみには必ず意味があるはずです。

ここで、一四歳の中学生が新聞に投稿した内容を紹介します。

新型コロナウイルスによる休校が始まってから二週間余りが過ぎた。学校に行けない寂しさはあるものの、私は何不自由なく生活している。

それは周りの大人が、なるべく日常生活に支障がないようにと力を尽くしてくださっているからだ。例えば、勉強は学校からの課題や教科書、それに塾などがネットで無料配信する映像授業なども見ることができる。友人ともメールし合ったり、遊んだり。読書や部活動の個人練習など好きなことに充てる時間も生まれた。

学校ですることが家で個人でもできるなら、わざわざ通学する意味は何だろう。今、学校生活と大きく違うのは、「嫌い」なものに触れなくなった点だ。

学校に行けば苦手な人と顔を合わせ、嫌いな教科を学び、時に退屈な時間を過ごすこともある。でも、その苦しみや複雑さも含めた日々は、何事にも代えがたい味わいがある。

好きなものばかりを選び取るのは良くないこと。学校では勉強だけでなく、人との関わりや課題を乗り越える力、生きていくために必要な力を学ぶものだと、休校体験から気付いた。余裕がなく、騒がしくて息苦しいほどのあの日々が愛おしく、また、今を少し物足りなく思っている。

中学生は、休校という機会に、『学校に行く意味』に気づきました。

人生には今回のように思いも寄らないことが起こりますが、自らの人生を、自らの力で切り拓いて欲しいと思います。完璧な安全などありません。心を広く持って長期化に備えましょう。雲の上はいつも晴れ、暗い夜にも必ず朝は来る、その気概でこの経験を糧にして大きく成長することを祈り、式辞とします。